

「ふるさと春日井学」研究フォーラム

Forum for Furusato Kasugai Studies

「ふるさと春日井」まちづくりへの応援メッセージ

『ふるさと意識なくして地域の活性化なし』

会報

NO. 77

2021.7.31 発行

編集責任者：河地 清

Kawachi-k@mb.ccnw.ne.jp

第77回「ふるさと春日井学」研究フォーラム

テーマ：『ふるさと春日井の古代ものづくりの源流探訪』

—西山遺跡→下原古窯遺跡→高根遺跡→下末古墳巡検報告—

春日井の西山・下原地域から小牧高根・下末地域の広い範囲にわたって古代の鉄・土師器の生産が行われていたことが伺い知れます。鉄・窯業生産のクラスターの存在形態を想像させる歴史的に重要な地域です。たたら遺跡発見のエピソードから今日までの遺跡保存の実情等を発表していただきました。

西山製鉄遺跡は、ふるさと春日井のものづくりの源流であることを、動画や図解資料を使って解説する
講師：梶田正直氏

中日新聞（2021.7.14）記事



2021年（令和3年）7月11日（日）市民活動支援センター（ささえ愛センター）において「ふるさと春日井学」研究フォーラムをテーマ「ふるさと春日井の古代ものづくりの源流探訪—西山遺跡→下原古窯遺跡→高根遺跡→下末古墳巡検報告—」は、梶田 正直氏（たたら研究会会員）で発表いただきました。参加者は18名でした。

《講演要旨》

最初に西山製鉄遺跡を知る上でまずは日本にいつどのようにして鉄が入ってきたのか簡単に説明します。歴史的背景を理解していただきたいと思います。

製鉄のはじまり

世界で初めての人工鉄は紀元前 24 世紀～23 世紀といわれています。鉄生産が本格的に始められたのは紀元前 17 世紀頃、ヒッタイト（現在のトルコ周辺）であったようです。ヒッタイトは紀元前 12 世紀に突然姿を消します。そして鉄生産は各地へ広がっていきました。その中でもヒッタイトの鉄聖生産を強く継承したのが紀元前 9 世紀～紀元前 4 世紀に繁栄したスキタイ人でした。彼らは鉄を利用し、その頃繁栄していたエジプトとの戦いだけでなく平和条約を結ぶなど、鉄を有効に利用しながら勢力拡大を有利に進めていたようです。または鉄を巧みに扱い、馬を乗りこなすための「はみ」（馬銜：馬の口に当てる部分）を作り出し遠くへ移動できる移動手段も手に入れています。そして東方のアルタイ地方（モンゴル北部にあるバイカル湖の西側に発見された王家の谷：アルジャアン）まで勢力を拡大しています。

その後、紀元前 3 世紀になると匈奴（きょうど）と漢（前漢）へ技術は伝播し匈奴は鉄鏃など強力な武器として鉄を進化させていきます。一方、漢ではとんでもない鉄のイノベーションを起こします。紀元前 141 年—87 年、前漢で一番栄えた時代、武帝の時代に今までの鉄から鋼を作る技術へ進化させます。今までの鉄は硬く脆いが、柔らかく丈夫な鉄・鋼を作り出します。これを境に今までの鉄は鋼にとって代わっていきます。また、農業革命も起こします。荒れた土地を開拓する際には牛に引かせる「りか」と呼ばれる道具を作り出し効率よく土地を耕すことができるようになります。その結果、今までの倍以上の収穫量を得ることができるようになりました。それによ、国が豊かに栄えていきます。一方、今まで利用してきた鉄は大陸で利用されなくなります。使われなくなった余った鉄はこれをきっかけとして日本に交易品として入ってきます。弥生時代中期の頃の話ですが、今までの考え方では石器時代の次が青銅器時代そして鉄器時代と思われていたものがその時期に青銅器と鉄器の 2 種類が同時に入ってきたということが研究でわかってきています。青銅器は主に装飾品や武器として、鉄は武器や農具・工具として利用されていきます。日本も鉄製品が手に入ったことによって農業や工業が急激に発展していきます。収穫量が増えそれを蓄えるための大型の建物、それを可能にする工具、大量の貿易を可能にするための大型の船など作られるようになっていきます。小さな集落は少しずつ大きくなっていき、集落同士の領地拡大に伴う占領や略奪が増え始めます。集落を敵の侵略から守るために環濠集落が作られ、倭国動乱の時代へ突入して行きます。

西山遺跡（西山製鉄遺跡）について

大陸では漢（後漢）が西暦 220 年に滅び、聖徳太子の時代遣隋使で有名な隋が西暦 581 年建国までの 361 年間、大陸では戦争が耐えることはありませんでした。その間も倭国は鉄を輸入に頼っていたにちがいません。しかし大陸の事情を鑑みた場合、大陸で需要が増えていた時代に倭国に送る鉄がどれほどあったのかを考えるとおそらく、需要に対し供

給量は少なかったと考えられます。しかし、そんな事情とは裏腹に倭国での鉄需要は増えていったのではないのでしょうか。そのような時代背景の中で考えたと思われることは、交易に頼らない自ら鉄を作り出すことであつたのではないのでしょうか。

6世紀中期以降の我が国での製鉄遺跡の発見は数多いが、それ以前の製鉄遺跡の発見はいまだありません。それを踏まえて考えると、日本における製鉄は6世紀中期以降より始まつた可能性が極めて高いと言えるのではないかと思います。

当時の鉄といえば強力な武器であり、農具や工具などの道具ともなっていました。その為、その素材を管理するには強大な権力と統治力がなければ鉄は管理できなかつたと思われるます。古代においてそれができるのは国家だけであつたと思われるます。国家が主導して製鉄を行なつたと考えてもおかしくはありません。また、その時期は律令体制が始まつた時期であり律令国家をめざした絶好のタイミングであつたように感じられます。春日井の西山製鉄遺跡もなんな形で当時の国家が関わつていたと考えられ、その影響を強く受けており、結果として製鉄の国営工場であつたと言えるのではないのでしょうか。

日本最古の製鉄遺跡は6世紀中頃の千引（せんびき）カナクロ谷遺跡（岡山県総社市）だと言われています。西山遺跡より東の製鉄遺跡は静岡県を飛び越え神奈川県や千葉県そして東北地方に存在しています。現在の成田空港の開発時には近江の製鉄遺跡の系統を受け継いだ製鉄遺跡が数多く発見されています。それを踏まえて推測して見てみると近江→西山→成田→東北といった古代製鉄の道が浮かび上がつて来ます。日本におけるアイアンロードの一路ではないかと想像できます。大変興味深いものです。

たたら鉄のこと

古代製鉄のことを「たたら」とも言います。その「たたら」という聴き慣れない言葉が映画などに出てくるのが過去にありました。有名なダンス&ボーカルグループ「エグザイル」が中心となつて制作した「たたら侍」。宮崎駿監督の「もののけ姫」です。

たたら侍はタタラ場のシーンを美しい映像にして忠実に再現しており素晴らしい映画でした。もののけ姫では誇大表現されているものの、たたら吹きシーンもあり理解していただくには役に立つものでありました。

西山製鉄遺跡を中心としてこの付近の遺跡を見てみると北側にある「リンの山」（小牧ジャンクション付近）と呼ばれる周辺に遺跡が存在することがわかります。東側には下原古窯・桃花源古窯・潮見坂古窯が、西側には尾北古窯群（篠岡古窯群）・高根遺跡・狩山戸遺跡などがあります。あたかもこの地域一帯が古代産業クラスターの様相をもつた風景が広がつていたことが想像できます。南東には松原神社（製鉄にゆかりがあるとされている：創建711年・明治以前は高牟神社と呼ばれていた）や弘法大師が休憩され水を飲まれたという伝承がある弘法大師（空海）霊場が現存しており古代においてこの周辺は賑やかな生業の場所であつたことが推測できます。

遺跡保存の現況

小牧の篠岡古窯の保存は公園の中にガラスで囲まれ、誰でも見学勉強できるようにされ



ていますが、春日井の下原古窯は自由に見学ができないだけでなく夏になると草むら化しその姿を見ることすらできません。また保管方法がテントであり遺構の破損なども心配されるところです。春日井市のいや日本の貴重な史料がこのような扱いをされていることに疑問を感じざるを得ません。

市井の考古学研究者梶田元司のこと

話は西山製鉄にもどし、西山製鉄遺跡について知っていたきたいことがあります。それは梶田元司（かじたもとし）という人物のことである。彼は下原古窯の発見を始め、多くの遺跡の発見と研究・遺跡の現地案内を行っていた、古代郷土史における影の功労者で

西山製鉄遺跡（草叢の下に埋まった遺跡）「たたら研究会」の説明を聞く

す。決して表に出ることはありませんでした。ゴーストライターみたいなものです。

彼の研究はかなり進んでいました。古代鉄についての考古学的な研究も今から約40年前にはその重要性に気づいており没頭していきます。そして、市内の研究者の方に重要性を常に訴えてきました。しかし聞き入れられることなく、逆に「学のない人間は黙っておけ」と言い捨てられていました。戦時中、青年期であったこともあり学校に行くことはできず家業の農業を継



西山製鉄大型炉跡（現在は埋め戻され上記写真）



西山の製鉄炉のイメージ図：長方形箱型炉大型

ぐことが強い時代ですから学校には行くことなどままならない状況であったことは理解できると思います。しかし彼は一人時間を見つけては研究に励んでいました。そんな元司から今までたくさんの恩恵を受けながら自分達がわからない分野だからと言うことで切り捨てるといったいかにも昭和時代の隠蔽体質のような態度をとっていたという研究者が身近にいたことが本当に残念でなりません。その影響で今日まで西山製鉄遺跡の存在も市民に広く知らされることなく現在に至っています。しかし、元司はそんなことはどうでもよく、ひたすら自分の古代鉄の研究をし続けていました。市井の考古学研究者でした。享年93歳まで毎日一心に研究し、ひたすら史実だけを求めていた様子が未だに脳裏に焼

き付いています。あたかも、「岩宿」遺跡の発見で知られた相澤忠洋（行商の傍ら旧石器時代の石器を発見し人類の存在を実証し学説を覆した）にも匹敵する人物の存在を忘れてはいけないと思います。

急がれる遺跡の保存・保護

西山製鉄遺跡とはどんな遺跡なのか触れてみます。全国的に古代製鉄遺跡の発見例はまだ数が少なく東海4県（愛知県・岐阜県・三重県・静岡県）において現存している唯一の製鉄遺跡が春日井の西山製鉄遺跡です。発見された遺跡は大型で遺構が綺麗な形で残っている全国でも極めて珍しいとても貴重な遺跡です。今のところ、日本にこれほど綺麗に残っている遺跡は他にないと思われます。愛知県では未だ製鉄遺跡は2例しか見つかっていません。一例目は昭和60年に狩山戸遺跡（小牧市）が発見されましたが都市開発の為、完全消滅し影も形も残っていません。古墳や古窯も大変重要であることにはわかりありませんが、数から見ると比べ物にならないくらい少ないのです。創業していた時代は7世紀後半（600年代後半）頃で今から約1300年前ではなかろうかと考えています。

発見に至るまでのエピソードとしては、春日井たたら研究会が発足したのが平成15年12月、4名でスタートしました。その翌年平成16年2月14日・年初の例会に突然、元司から遺跡付近の畑（まだ遺跡がみつかっていないときですから畑だったわけですけど）その埋め立て工事が始まっていると連絡が入る。たたらメンバーが駆けつけた時、すでに柿の木など半分くらいは抜かれていた状態だったようです。土砂が積み上げられ重機・シャベルカーが待機しているといった状態は、みな啞然とした表情だったようです。たたらメンバーがその場でできることは、地面に落ちている鉄滓（てつさい）を拾うことくらいでした。唯一の救いが、工事を請け負った会社が可児建設であり元司とは幼い頃から一緒にいた家族のような繋がりのある会社であったことでした。また狩山戸遺跡の工事請負業者でもあったこと。元司の願いを聞いてくれ工事を一旦中止にしてくれました。工事会社にとって遅延は今も昔も厳しく難しい話であることは十分理解しているところですがあえて止めてくれた事がまず奇跡的でした。そして、たたらメンバーが一斉に鉄滓の収集をし始めます。その時の様子として最初は小さな破片程度のものが深く掘れば深く掘るほど大きなものが出てくるようになってきたと聞いています。その時、「これはたたとではない」と感じたそうです。工事もゆっくりですが進められていたところから集中して鉄滓が出てきます。その箇所の1m手前で重機を止めてくれたようで、その集中して出てくる大箇所を調査したところ何やら円形土坑（えんけいどころ）のようなものが見つかりました。さらに、それまでに拾った鉄滓が200kgを超える量になっていたことから尋常でない状態だと身震いしたそうです。そんな思いから当時名古屋女子大学教授丸山竜



出土した「鉄滓」

平先生に連絡し2月22日(日)に現地確認して頂きました。丸山先生の指摘では大規模な遺跡の可能性が高い、事態は深刻であるとのことでした。翌日、2月23日(月)現伊藤太市長が当時市議会議長であった時、陳情をおこない3月初旬に文化財課による発掘調査が行われました。発掘調査開始後まもなく製鉄の石組が現れ間一髪のところ西山製鉄遺跡は奇跡的に救われたのです。そして3月27日に西山製鉄遺跡の説明会が開催されました。ここに春日井市が全国に誇れる歴史遺産が姿を表したのです。(西山製鉄炉遺構、炉床部長軸 2.7m/単軸 1m 日本においても大型分類される)この先西山製鉄遺跡は今後どうなっていくのか。現在の西山製鉄遺跡はまだ市民に認知されていない遺跡です。遺跡の価値としては今の段階でも専門家からは国指定レベルであると言われていています。にもかかわらず市民に知らされないことがないのが現状です。

春日井市においても古代製鉄に関する研究者は大変少なく数人しかいないというのも一つの原因でしょう。遺跡の存在は事実を証明しておりこの地に偽りでなく伝説でもなく真正銘の本物があるということを表しています。また現時点で東海地方に唯一ひとつしか現存していない遺跡であるにもかかわらず、現状のその扱いは乱暴なものになってしまっているのが事実です。大変悲しく思いますが、ただ明るい話題もないわけではありません。4年ほど前から現在の西山製鉄遺跡からほど近い場所より、古代において製鉄作業をした時にでる鉄滓(てっさい)が新たな場所から出土していることを発見した。これは私の勘ですが県内3つ目の製鉄炉ないし関係する遺跡があるのではないかと考えています。3つ目が発見されればそれはまた今までのようにはいかないはずではあります。

※講演要旨は、梶田正直氏に寄稿していただいた原稿を承諾の上編集したものです。(編集責任:河地 清)

〈会報編集後記〉

※7/11(日)77回フォーラムの梶田正直氏の講演は、パワーポイントの技法が効果的に使用され大変わかりやすいお話でした。「むずかしいことをやさしく、やさしいことをふかく、・・・」井上ひさしの名言を改めて感じました。

※西山製鉄遺跡は、「ふるさと春日井」の誇れる、ものづくり歴史遺産だと思います。保存すべく環境整備を官学民協働で急いでほしいと思いました。

※『一度失ったらもう創り出すことができない文化財保存につとめることは、千数百年の文化を大切にすることにとどまらず、今を含む歴史を大切にすることを重視することである。たんなる地方の史的研究にとどまるのではなく、地方(地域)の改良(活性化の学)でなければならない。経世済民、自力更生=地域活性の学=まちづくりの学である。』(芳賀 登『地方史の思想』)『どの地域にもある歴史遺産を現代の資産とするという発想が新しいまちづくりの方法である。文化とか幸福を地域社会の目標とし、伝統や文化を自信を持って発信し、生活している人々が幸せを感じることでできる都市環境を創って行くことを考えなければならない。』(月尾嘉男『縮小文明の展望』)

※65回フォーラム(2019.1.13)「古代製鉄たたら西山遺跡の保存活動」小木曾真秋氏(たたら研究会会員)「たたら製鉄から見るグローバルゼーションと地球環境」渋井康弘氏(名城大学経済学部教授)も併せて参照して下さい。(文責:河地 清)